

第三七章 教会・奉仕と管理責任

I 神に対する奉仕

奉仕とは他の人を益するためになされる働きのことである。この主題を聖書の中にたどってみると、旧約聖書と新約聖書の間の類似点と相違点が浮かび上がってくる。

1 供え物としての奉仕は旧約と新約とで驚くほど似かよっている。

旧約聖書の奉仕の予型として祭司があげられる。彼らは神への奉仕のために召され、清めの洗いを受ける。対型として新約聖書ではすべての信者が祭司となる。彼らは新生によって聖別されている。

新約聖書で神への供え物を捧げる祭司の奉仕は4重である。①霊的な礼拝(ロマ12:1) ②賛美の声、くちびるの供え物(ヘブル13:15) ③財産の供え物(ピリピ4:18) ④善行の供え物(ヘブル13:16)

祭司の清めにおいても教えられる。祭司はその職に就くとき一度だけ清められた。その後も洗盤で部分的に清められる必要がある。同じように、クリスチャンも信仰と共に罪の許しを経験し、清められているが、その後も気付かされる罪を繰り返し告白して許される必要がある。(Iヨハ1:9)

2 礼拝の奉仕についても旧約聖書は新約聖書の礼拝を予型している。

聖所の装飾物やあらゆる特色がキリストのことを表していたように、私たちがキリストにより、キリストを通してのみ行われる。

また、異なった香を捧げることは禁じられた。(出エジ30:9) これは、御霊による礼拝を、肉的なことにかえることを、あるいはキリストへの愛を排除してしまうまでに、それ以下のものを愛することを戒めている。(Iコリ1:11-13、コロ2:8、16-19)

3 とりなしの祈りも、クリスチャン―祭司の重要な役割である。

預言者は民に対して神を代表していたように、祭司は神に向かって民を代表する。

旧約聖書では大祭司だけが年に一度、至聖所へ入ることを許されたが、今やすべてのクリスチャンは、神の前に出てとりなしをする特権に与っている。(ロマ8:26-27、ヘブル10:19-22、Iテモ2:1、コロ4:12)

II 人に対する奉仕

ロマ12:1-8に見られる真理の配列には神の深いはからいがある。クリスチャンの奉仕は、献身と聖別という大切な問題が示されるまでは言及されていない。これに関する使信に続いて、奉仕のために神から与えられた賜物についての言及がある。

賜物とはその性格から、聖霊によってクリスチャンに備えられた能力であるということが言える。これは祭司としての務めとはちがって、一人一人に違ったものが備えられている。そして、それは「皆の益となるため」(Iコリ12:7)と書かれており、決して肉的な力によってなされてはならないものである。それは御霊によって為されるとき、はじめて「皆の益」となるのである。

Ⅲ 管理の責任

クリスチャンの管理の責任は3つの面から考察できる。

1 働いて金銭を得ること

クリスチャンにとって、金銭を得ることは、彼と神との関係にふさわしい方法で為されなければならない。(Ⅰコリ 10:31) 働くことは神によって定められており(創世記 3:19、Ⅱテサ 3:10) クリスチャンも例外ではない。クリスチャンにとっては労働は単に生活の糧を得るだけのものではなく、それは神のみ旨を行うことなのである。

2 金銭の所有は誠実なクリスチャンにとって大きな責任となる。

金銭を所有し、蓄えることは疑いもなくしばしば神のみ旨である。しかし、このことを当然の既成事実として考えないで、彼の財産は神が導かれるようにのみ保持されるべきである。

3 クリスチャンが自分の得た金銭を捧げることは重要な奉仕の一面である。

クリスチャンが金銭を捧げることは、その所有と同じく、神の恵みの上に立つものであり、まず、無条件の献身をもって神に捧げたことを前提としており(Ⅱコリ 8:5)、神への真の自己献身は、人の存在と所有のすべてを含んでいる。(Ⅰコリ 6:20、7:23、Ⅰペテ 1:18-19)

クリスチャンの献金の原則はⅡコリ 8:1-9:15に要約されている。

- ①キリストが彼らの模範であった。
- ②彼らの捧げ物は非常な貧しさの中からもなされた。
- ③彼らの捧げ物は命令によるのでも、やむおえずなされたのでもなかった。
- ④彼らはまず自分自身を捧げた。
- ⑤彼らはまた、計画的に捧げた。
- ⑥神は与えるものを支えてくださる。(Ⅰコリ 16:2)
- ⑦真の富は神からくる。